

株式会社石原建築

事業

伝統建築に精通した宮大工が製造する
神社仏閣向け建具の製造事業

対象類型

ものづくり技術

導入機械装置

全自動NCラジアルソー/KMC-76ZF
組子用自動一面かんな盤/DGM-250THD

経営理念

伝統建築技術を衰退させることなく継承し、日本建築文化の発展の一端を担う

社寺建築を専門的に手掛ける宮大工集団 国宝松江城の耐震工事でも存在感放つ

神社仏閣など、歴史的建造物の建築や補修を主に手掛ける宮大工。金物などに頼らず、切り込みを施した木材をはめ合わせて組み上げる「木組み」や「継手」など、高度な技術で数百年先まで残る建築物を手掛けるプロフェッショナルだ。株式会社石原建築は江戸時代後期より代々大工を家業とし、宮大工として修行を積んだ石原幸吉氏が1956(昭和31)年に創業し、社寺建築を専門的に手掛ける宮大工集団として設計・施工を担い、出雲大社や佐太神社など島根県内の神社仏閣を始め、北海道から九州まで全国各地でも新築、改修、文化財修復に力を注いできた。

2019(令和元)年に施工した松江城の耐震工事では、国宝の古材に釘を打つことができないため、加工した新しい柱を古い柱に密着させて強度を高める「ひかりつけ」という技術を施した。直線ではない昔の柱の表面に、ぴったりくっつくよう新たな材を加工する作業は非常に難度が高い。5代目の石原司代表取締役は「一つとして同じ状態の材はなく、マニュアルが通用しない世界。現場ごとの対応力が求められる」と話す。

設備導入で技術習得期間を短縮 宮大工が建具制作も担える体制を確立

しかし、全国的に宮大工の数は減少。文化財の建築補修には、戸や、欄間などを作る木建具職人や左官など、多くの専門職人が必要だが、いずれも深刻な人材不足に陥っている。

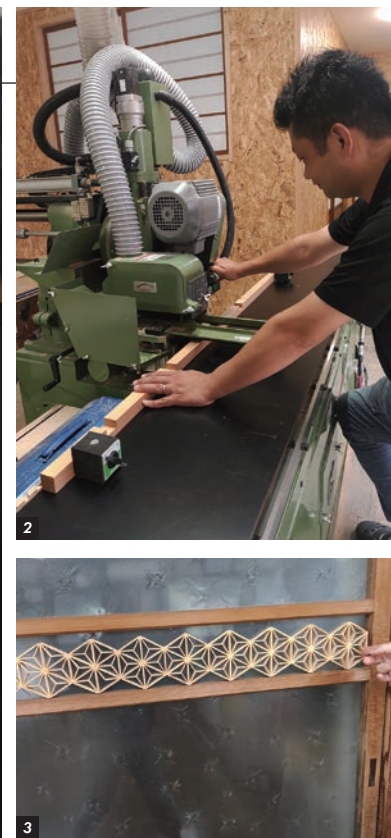
同社も例外ではない。宮大工こそ、Uターンで就職した20～30歳代を中心に7人の職人が在籍するが、建具工事においては長年、社寺用建具の仕事を依頼していた大田市の職人が80歳を超え、後継者のいない状況に不安を抱いていた。県内外で新たな外注先を探したものの、同様に高齢化や廃業が進んでいるか、京都や奈良など高い需要がある地域では外注費が現状の約2倍に跳ね上がることが分かった。



石原建築が施工した山口県の景好寺本堂



1.1ミリ以下に削れる組子用自動一面かんな盤
2.新たに導入した組子細工機「全自動NCラジアルソー」
3.機械を活用することで、経験の浅い社員でも繊細な組子加工が可能に(試作品)



そこで建具制作の内製化を目指して2022(令和4)年9月、組子細工用の最新鋭機械「全自動NCラジアルソー」と、1ミ以下まで薄く削れる「組子用自動一面かんな盤」を補助金を活用して導入。数値を入力するだけでプログラムが自動作成されるため、経験が少ない大工でも高度な組子などの刻みが可能となった。「手道具で木を扱うという共通点から、かつては建具仕事も大工が担っており、木の扱いに慣れた弊社の大工なら、通常10年弱の経験が必要な建具制作の技術を比較的短期間で習得できると考えた」と石原代表取締役は期待する。現在は、ベテラン職人の指導を仰ぎながら、導入した機械を使って建具を制作。大工仕事の需要が立て込んでいて研修時間は限られているが、機械操作に慣れれば、最終的には従来の半分から3分の1のスピードでの制作が可能になるという。

生産性向上やコストダウン狙いつつ 伝統文化や技術の継承目指す

建具制作の技術を習得すれば、大工仕事とセットで受注できるため、生産性向上が期待でき、同業他社との競争力も向上。また、文化財に用いる木材は非常に大きいため、大工仕事で出た端材を建具用に活用することも可能で、コストダウンも図れるという。「文化財は今後も増えていくので市場には安定した需要が見込まれ、事業の成長につながっていくと考えている。最新鋭の機械を活用しつつ、高い技術力を持つベテラン職人から伝統的な建具製造技術を学ぶことで、数百年の歴史がある文化や技術の継承にも貢献したい」と、石原代表取締役は文化財保護の一端を担う未来を見据えている。

Company Data

株式会社石原建築



外観

代表者名	石原 司
創業年	1956(昭和31)年
資本金	10,000千円
従業員数	8名
主たる業種	建築一式工事業
本社	〒694-0431 大田市祖式町359-1
電話	0854-85-2355
FAX	0854-85-2425